

大好きな姉を追って

パラライズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

深海棲艦との闘いを始まり数年。

艦娘という少女が世界に現れ、人々の暮らしは、少しずつ、安定を取り戻してきた。

そんな中、艦娘になった少女、浜風と磯風。

先に艦娘になった姉妹をさがして、彼女たちの鎮守府での戦いが始まる。

前日譚

# 目次

1



# 前日譚

陽炎型駆逐艦。

かつて、世界の海をかけた、艦隊戦特化型駆逐艦。

一度不知火型に名前を変えたこともあったけれど。

.....

それが、今の私たちの名前だ。

もともとの名前は、もう、使えない。

そういう規約つていうのもあったけれど、何よりも、見た目が少し変わってしまった。

あの子は、髪も瞳も青色になったし。

いつも一緒にいた姉妹も、瞳の色が赤くなった。

かくいう私も、今では青い瞳に、髪も色が変わっている。

この姿になったきっかけは、なんだったか。

長女が失踪したことに始まった。

私たちは、ちゃんとした親はいなかった。

施設で保護された、その人数、10数名。

なぜそんなに、といえれば、簡単に、父親が犯罪者であった。

それも、性が付くほうの。

ゆえに、私たちは、血のつながりは、半分しかなかった。

だが、それでも、一緒に暮らしている年月は、強い力を持つもので、当然、互いに家族として認識していたのだ。

……。

が、それがいけなかった。

施設、は、文字通り、親のいない子供たちが暮らす場所であった。

かつての平和な日本ならいざ知らず。シーレーンを深海棲艦に乗っ取られて、国力が削られ。

そのうえ、まだ、艦娘という存在がまともになかった時代。

人は消耗品のように使われた。

そうしないと、生きていけなかった。そういう理由で親を亡くした。

家族を失った存在は多い。

その中に、10数人、集団で、家族が入ってきたのだ。

もともといいた子たちからしたら、いやな存在だっただろう。

自分たちが失ったものを見せつけてくる存在。

少数ならいい。

兄弟姉妹は、少なからずいた。

けれど、この時の私たちは、言った通り、10人を、優に超えていた。

そのうえ、長女と、末っ子で、年齢差が、7はあつた。

行つてしまえば、一番上の姉は、末っ子からしたら母親。

そうでなくとも、ほかの妹たちも、私を含め、姉を慕っていたのだ。

簡単に言えば、嫉妬の嵐に襲われた。

当然、職員からの扱いもよくはなかつた。

姉妹の世界は、長女を除けば、閉じられたものであつた。

何があつても、姉が守つてくれる。と。

しかし、終わりというものは、突然やってくるものであつた。

長女が、姿を消した。

本当に突然。

まるで、最初から、そこにはいなかったかのように。

お気に入りだったものから、普段使っていた服まで、何一つそのままに、ふと、姉だけが姿を消した。

当然、私たちは探し回つた。

その時ばかりは、いつもクールな二女も、穏やかな三女でさえ、泣きわめきながら、けれど、職員も、口を閉ざし、姉の行方など、当時の私たちが知る由もありませんでした。

その代わり、私たちは、莫大なお金と、住む家が渡されました。

当然のように、姉妹全員が暮らせる家。

一緒に通える学校。頼れる大人。

……。

ただ、そこにも、やはり、大好きだった姉の姿はありませんでした。

2年経って。

悲しくとも、姉のいない生活に慣れたころ。

次女が、突如言い出したのです。

艦娘になりましょう、と

きつと、私たちの姉さんはそこにいると。

そこからは早かった。

検査を受け、適性を調べた。

結果からいえば、即座に合格できたのは、三人だけであった。

次女、三女、六女。

三人は、すぐに艦娘になれる。

けれど、ほかの姉妹は、また、おいていかれた。

体ができていなかった、というわけではない。

単純に、適性のある艦が、見つかっていなかったのだ。

ゆえに、その艦が来るのを、訓練所で、待つて、待つて、待ち続けた。

そして。

それから、さらに、4年。

ついに、私たちに、適合艦が見つかった。

そのころには艦娘の活躍で、日本自体はかなり安定し、海外へと足を延ばそう、とい

う話が施設内で広まった頃であった。

ここままで、6年。

「……姉さん今探しに行きます」

そんな思いを込めて、私たちは、改造に臨んだ。

そう、その時はじめて知ったのです。

艦娘の元の肉体は、艦娘になった時点で固定されてしまうことを